

東京都立埋蔵文化財調査センター平成30年度企画展示

あの水平線の向こうに幸がある。

う み

蒼海わたる人々

考古学から見たとうきょうの島々

平成30年3月21日祝 ▶ 平成31年3月10日日

東京都立埋蔵文化財調査センター

プロローグ

大島
利島
新島
式根島
神津島
三宅島
御蔵島

日本の最南端と最東端、東京都にあるのをご存知ですか？

広大な太平洋に点在するとうきょうの島々にも、いにしえひと 古人の生きた証がたたくさん見つかっています。

このひととき、皆さんを時空を超えた島めぐりにご案内しましょう！

八丈島

青ヶ島

鳥島

展示内容

【Ⅰ 海の幸を求めて】

くらしを支えたこくようせき 黒曜石
あこがれのオオツタノハ
島の海産物加工

【Ⅱ 島に生きる】

島の恵み、いただきます！
火山にいの 祈る

【Ⅲ 海でつながる世界】

黒潮をまたにかけて
危険と隣となりあわせの航海
はるか南洋を越えた人々
蒼海うみわたる人々

小笠原諸島

父島

母島

北硫黄島

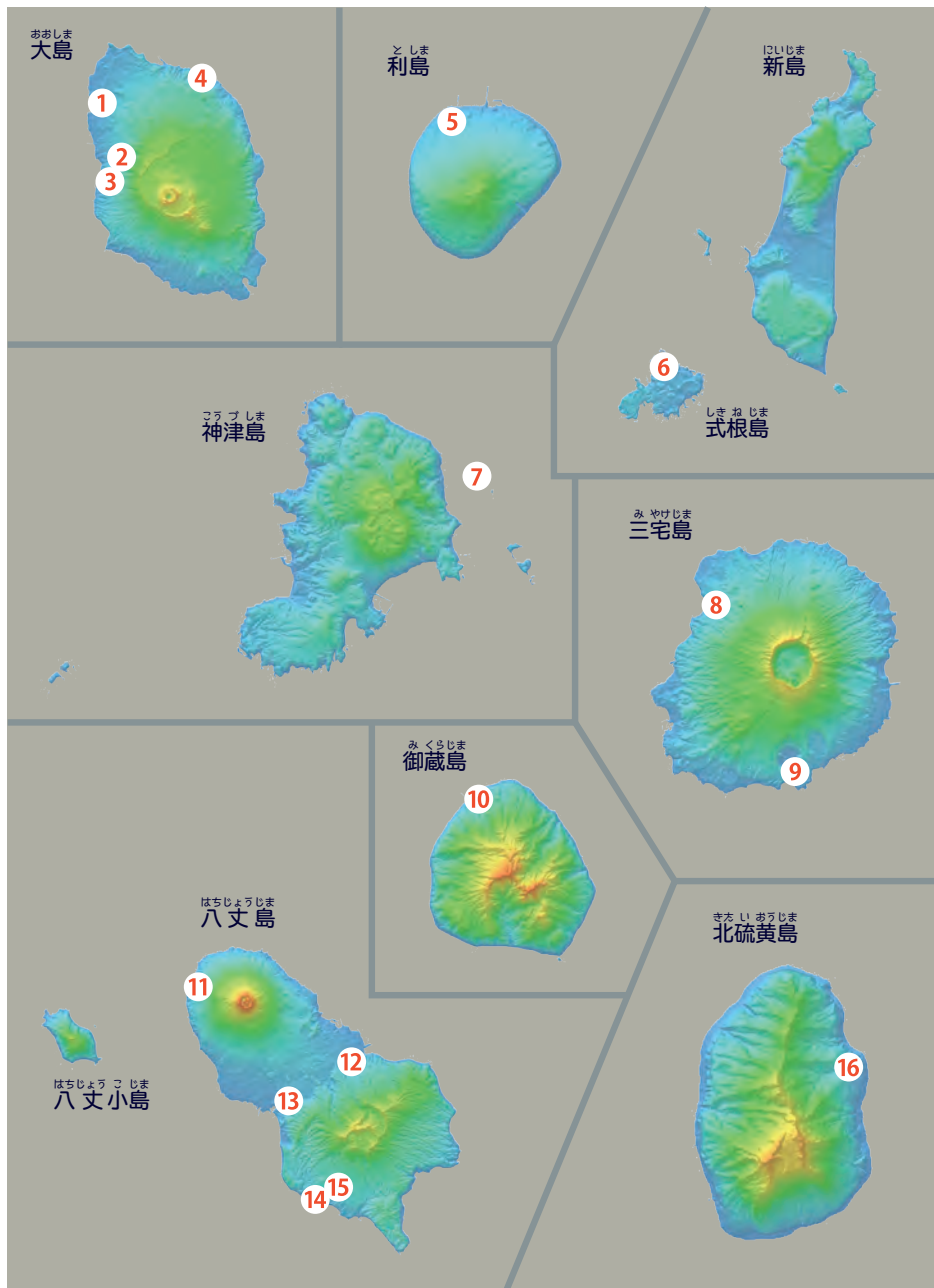
硫黄島

南硫黄島

※この地図に、沖ノ鳥島（最南端）、南鳥島（最東端）は入っていません。

企画展示で取り上げたとうきょうの島の遺跡

地図：国土地理院数値標高モデルより作成（縮尺不同、地図上が北）



1. 和泉浜C地点遺跡 2. 大島八重川遺跡 3. 下高洞遺跡 4. 泉津鉄砲場遺跡 5. 大石山遺跡
 6. 吹之江遺跡 7. 神津島沖海底遺跡 8. 物見処遺跡 9. ココマ遺跡 10. ゾウ遺跡
 11. 火の瀉遺跡 12. 供養橋遺跡 13. 八重根遺跡 14. 倉輪遺跡 15. 湯浜遺跡 16. 石野遺跡

くらしを支えた黒曜石

Obsidian that Supported the Lives of the Ancients



神津島砂糠崎の黒曜石の大露頭 黒い帯状の部分が黒曜石
画像：神津島村提供

黒曜石は、溶岩が冷えて固まった天然のガラスです。割れ口が鋭利な刃になることから、金属を持たなかった旧石器時代や縄文時代の人々にとっては、槍先や矢じりを作るうえで欠かせない石でした。その黒曜石の限られた産地のひとつが、都心から約170kmも離れた神津島にあります。ここ多摩をはじめ、関東各地の遺跡からたくさんの神津島産黒曜石が見つっています。この貴重な資源は、はるか海を越えて島から運ばれていたのです。

Obsidian is a natural glass made of lava cooling and hardening. Its broken edge becomes a sharp blade. So, it was essential in making spearheads and arrowheads for the people of the Paleolithic and Jomon Period who did not have metal. The areas that produces obsidian are limited. One of them exists on Kouzushima Island, about 170 kilometers away from the center of Tokyo. Many obsidians from Kozushima Island are found from remains of the Kanto region, including the Tama area here. This precious resource was carried across the ocean.



旧石器時代の黒曜石製石器

- ①～③津久井城跡(馬込地区)、④～⑧用田鳥居前遺跡、①～⑧神奈川県教育委員会所蔵
⑨多摩ニュータウンNo.388 遺跡 ⑨東京都教育委員会所蔵
①～③台形様石器、④～⑧細石刃、⑨ナイフ形石器。

黒曜石で作ったいろいろな道具

旧石器・縄文時代の人々は、黒曜石で槍や矢じり、ナイフ、錐などさまざまな道具を作り出しました。特に、重要だったのが狩りの道具です。食料などの獲得を狩りに頼っていたこの時代、道具のよし悪しは、人の生死にも直結する問題だったのです。

縄文時代の黒曜石製石器

- 多摩ニュータウンNo.72 遺跡
東京都教育委員会所蔵
①石匙、②・③石錐。



とうきょうの島で採れる黒曜石

ほかの産地と違い、神津島は海に隔てられています。関東各地の遺跡でも、神津島産の黒曜石が数多く見つかっています。当時の人々は、なぜ神津島産にこだわったのでしょうか。

遺跡から出土するの神津島産黒曜石には、砂糠崎さぬかざきと恩馳おんげせと2つの産地がありますが、特に、恩馳の黒曜石は不純物が少なく、良質であることが知られています。質の高い黒曜石だからこそ、彼らは強く求めたのです。



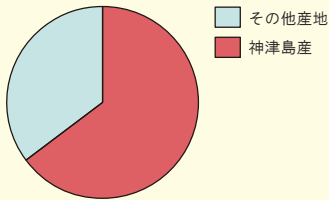
神津島恩馳産の石核 [原口遺跡]

縄文時代中期 神奈川教育委員会所蔵



遺跡出土の神津島産黒曜石の産地
砂糠崎は神津島東岸に位置する。一方、恩馳は神津島南西の沖合いに位置する。

多摩ニュータウンNo.72 遺跡の
神津島産黒曜石の割合



石鏃 [多摩ニュータウンNo.72 遺跡]

縄文時代中期 すべて東京都教育委員会所蔵
ここでは、出土した黒曜石 656 点の産地を調べたところ、約 65% が神津島産であることが分かった。

神津島産黒曜石の広がり

今から約 5,000 年前の縄文時代中期は、神津島産の黒曜石が盛んに利用された時代です。東京周辺のこの時期の遺跡を見ると、集落で使われた黒曜石の実に 9 割近くが神津島産という遺跡もあります。

原口遺跡では、総重量にして約 90kg もの黒曜石が見つかり、その大部分が神津島産でした。中には、加工していないの黒曜石の大きなかたまりもあることから、黒曜石の加工地もしくは中継地であることが考えられます。

島からもたらされた貴重な恵みは、このように関東各地へ運ばれて行きました。



原口遺跡の黒曜石集積
石器の材料として保管
していたのだろうか。
画像：神奈川教育委員会
提供

※原口遺跡…神奈川県平塚市にある
縄文時代中期の遺跡。

あこがれのオオツタノハ

The Precious Ootsutanoha



ココマ遺跡（三宅島）から見る御蔵島 ^{みくらじま} あその島影に近い荒磯でオオツタノハが獲れる
画像：東京都教育庁三宅出張所提供

オオツタノハは暖かい海に棲む貝です。とうきょうの島々では、三宅島より南、しかも波の打ちつける荒磯 ^{あらいそ} でしか獲れません。その貝殻で作られた腕輪 ^{うでわ} 一貝輪 ^{かいわ} は縄文時代から珍重 ^{ちんちょう} されてきましたが、弥生時代になると、組織的に生産され、広く流通するようになります。

三宅島のココマ遺跡は弥生時代中期～後期（約2,000年前）の遺跡。オオツタノハ製貝輪の生産・流通 ^{たずさ} に携わる三浦半島 ^{みうらはんとう} の人々が、漁期にだけやって来て、沖 ^{おき} の岩場で貝を獲るためのキャンプ地だったと考えられています。

Ootsutanoha (*Patella optima*) is a shellfish that lives in the warm ocean. At the islands of Tokyo, it can only be found on the rocky shore beaten by waves, south of Miyakejima Island. The *Kaiwa*, bracelets made from shells, were much-prized since the Jomon Period. However, it was widely distributed as people started to produce it systematically from the Yayoi Period.

Kokoma Site on Miyakejima Island is a remain from the middle to late Yayoi Period (probably 2,000 years ago). The site is considered to have been a campsite for the people of Miura Peninsula, who took part in the production and distribution of *Kaiwa* (shell bracelet) made of Ootsutanoha, to catch the shells on the rocky offshore areas during the fishing season.



ココマ遺跡

画像：杉山浩平氏提供

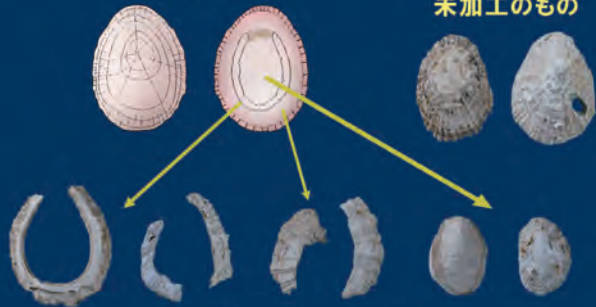


現生オオツタノハ

千葉県立中央博物館所蔵
^{はちじょうこじま} ^{とりうち}
八丈小島の鳥打で採集
されたもの。

オオツタノハ模式図

未加工のもの



貝輪製作工程で生じた破片

オオツタノハ [ココマ遺跡]

弥生時代中期～後期

三宅村教育委員会所蔵

ココマ遺跡からは、貝輪製作の工程で生じたオオツタノハの破片が大量に出土した。長期間にわたって生活を営んだ痕跡がないことから、獲った貝に最低限の加工をしたうえで、本拠地へと持ち帰り、仕上げたと考えられている。

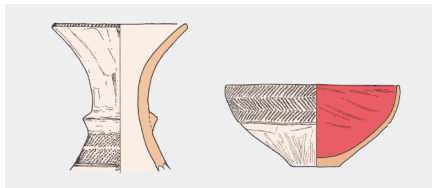


オオツタノハ製貝輪 [雨崎洞穴]

弥生時代中期～後期

赤星直忠博士文化財資料館所蔵

三浦半島の南岸に多く見られる海蝕洞穴では、オオツタノハ製貝輪がいくつも見つかっている。



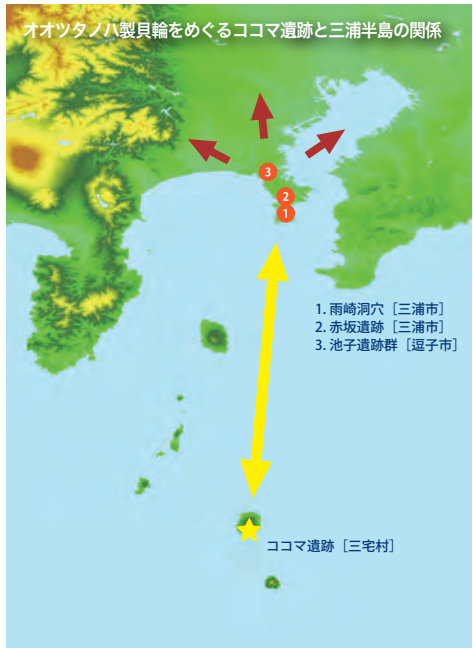
ココマ遺跡の土器とそっくりな土器

左は池子遺跡群の土器、右は赤坂遺跡の土器

実測図：

左 1999 かながわ考古学財団調査報告 46『池子遺跡群X』（財）かながわ考古学財団を転載、一部改変

右 2004 三浦市埋蔵文化財調査報告書 13『赤坂遺跡』三浦市教育委員会より転載、一部改変



オオツタノハ製貝輪をめぐるココマ遺跡と三浦半島の関係

1. 雨崎洞穴 [三浦市]
2. 赤坂遺跡 [三浦市]
3. 池子遺跡群 [逗子市]

ココマ遺跡 [三宅村]



弥生土器 [ココマ遺跡]

弥生時代中期 三宅村教育委員会所蔵

①～④は壺、⑤・⑥は甕、⑦は鉢。縄文を沈線で縁取っている③や、粘土を輪積みした跡が残っている⑤など、三浦半島の土器とよく似た特徴を持っている。②は池子遺跡群に、⑦は赤坂遺跡に類例がある。

島の海産物加工

Seafood Processing on the Islands



大坂トンネル展望台から八重根遺跡を望む 印の先に八重根遺跡がある

古代においても、島での主要な生業は漁撈でした。黒潮を回遊するマグロやカツオなどの大型魚の捕獲や、塩づくりなど、人々は大自然を利用したさまざまな営みを展開してきたのです。

やがて、島の民には遠く離れた都に「海の幸」を納めるといふ、とても重大な使命が課せられました。駿河や伊豆で見られる鍋形土器は、カツオを煮るためのもので、堅魚節を生産したと考えられています。

Fishing was the major occupation on the islands even during the ancient times. People developed various activities by utilizing the nature, such as salt-making and fishing of large fish like tuna and bonitos that swam around the Black Current.

Eventually, the people of the islands took on a very important mission to deliver the *Blessings of the Sea* to Heijokyo Nara capital far away. Pot-shaped pottery found in Suruga and Izu area was for simmering bonitos and are thought to have produced dried bonito.



土師器 鉢・小形壺 [八重根遺跡]

古墳時代（7世紀） 八丈町教育委員会所蔵

八重根遺跡は、八丈島の西側中央部の入江付近から発見された遺跡で、現在の八重根漁港がある場所。遺跡からは、多数の炉跡と多量の土器が発見された。出土した土器はすべて煮炊き用の粗雑なつくりで、底部が極端に小さく、口が大きく広がる鉢形や鍋形を呈していることから、おそらく堅魚を煮るためのものと推定される。



土師器 鍋形土器 [大島八重川遺跡]

奈良時代（8世紀） 大島町教育委員会所蔵

銅形土器が出土した遺跡の分布



三宅島以北では、全体に「刷毛目」をもつ駿河・伊豆系の銅形土器が多く見られる。その一方で、八重根遺跡の土器は、他の島から見つっていない特異な土器である。

「荒堅魚六連八節」

天平七年十月

「駿河国駿河郡柏原郷小林里戸主若舍人部伊加麻呂戸若舍人部人麻呂調」



「麻呂調荒堅魚十一斤十兩」

天平七年十月

「駿河国駿河郡柏原郷小林里戸主若舍人部伊加麻呂戸若舍人部人」

かつかおなし 平城京の木簡
堅魚節の存在を示す

「荒堅魚」とは、カツオを煮て、くん製にした生節と考えられている。

画像：1990『木簡研究』12 木簡学会より転載



土師器 [火の瀉遺跡]

平安時代 八丈町教育委員会所蔵

火の瀉遺跡は、島の北西端の崖上で見つかった。出土した土器はどれも厚手で、すべて熱を受けて表面が剥がれていた。これらの土器はその特徴から、製塩土器と考えられている。



火の瀉遺跡調査風景 平成2年(1990)

遺跡からは、正面に八丈小島を望むことができる。

画像：1991『火の瀉遺跡』東京都八丈町教育委員会より転載

島の恵み、いただきます！

Enjoy a Taste of the Island's Blessings



大島町・泉津鉄砲場遺跡近景 印の先、くぼんだ岩陰の先に遺跡がある

島の縄文時代の遺跡からは、動物や魚の骨、貝殻などが多く見つかっています。これらは島にくらした縄文人の言わば「食べカス」。ゴミと思われそうですが、当時の食べ物事情を探るうえで情報の宝庫なのです。調べてみると、彼らは、島に生息していないはずのイノシシまでも食料としていたことが分かりました。

こうした動物の骨や牙は、生活道具を作る素材としても重宝されました。島がもたらす恵みは、人々の知恵によって、さらに豊かになっていったのです。

Many shells and bones of animals and fish are found from the island remains of the Jomon Period. These are, in other words, the *leftover food* of the Jomon people who lived on these islands. These may seem like trash, however, these are a valuable source of information in researching the food they ate at the time. After researching, it was found that the Jomon people also ate wild boars that should not live on the island. The bones and tusks of such animals were utilized as materials to make tools for living. The blessings brought by the island were further enriched by the wisdom of the people.

縄文人はどんなものを食べていた？

大島の泉津鉄砲場遺跡や下高洞遺跡で見つかった動物骨を見てみましょう。陸上の動物に比べ、魚類や貝類が目立ちます。ウツボにコブダイ、ボウシュウボラやサザエ、どれも岩場で獲れるものばかり。さらにはサメやイルカ、ウミガメなども見られます。遺跡は海に面した場所にあり、豊富な海の恵みが縄文人の暮らしを支えていたのです。



魚骨 [下高洞遺跡 (D 地区)]

縄文時代後期～晩期 大島町教育委員会所蔵
①ハリセンボン上顎骨、②ウツボ左歯骨、
③ネコザメ歯。



左の画像3枚：葛西臨海水族園提供

貝類や海洋生物の骨 [下高洞遺跡 (D 地区)]

縄文時代後期～晩期 大島町教育委員会所蔵

- ①ボウシュウボラ、②マツバガイ、③アオウミガメ上腕骨、④イルカ腰椎



イノシシは島の外からやってきた！？

イノシシは本来、伊豆諸島の島々に生息していないとされていますが、島の遺跡からは実に多くの骨が見つっています。こうしたイノシシについては様々な意見がありますが、縄文時代早期以降、人間の手によって島へ持ち込まれたことは確実に考えられています。

下高洞遺跡出土のイノシシの骨

- ①：下高洞遺跡 (A 地区) 縄文時代早期
②～⑦：下高洞遺跡 (D 地区) 縄文時代後期～晩期

すべて大島町教育委員会所蔵

- ①下顎骨、②第1頸椎(環椎)、③寛骨、④肩甲骨、⑤上腕骨、⑥中手骨、⑦脛骨。



角や牙、骨で作った道具あれこれ

動物は食べるだけでなく、その角や牙、骨を生活道具や装身具を作る材料として盛んに利用していました。特にシカの角は硬いうえに弾力もあるため、釣針や装身具を作るのに重宝された素材です。イノシシの雄に生えている大きな牙。これも装身具の素材として使われました。このほかにも、サメの歯に穴を開けた垂飾や鳥の骨で作ったビーズなどもあります。島の縄文人は、豊かな発想で身近な素材を使いこなし、生活に役立てていたのです。



さまざまな骨角器

- ①～⑤・⑦・⑧・⑩・⑪下高洞遺跡 (D 地区) 縄文時代後期～晩期 大島町教育委員会所蔵
⑥・⑨倉輪遺跡 縄文時代前期～中期 八丈町教育委員会所蔵

- ①イノシシ犬歯製矢じり、②イノシシ犬歯製垂飾、③イノシシ第1切歯製腕飾、④鹿角製矢筈、⑤鹿角製矢じり、⑥鹿角製釣針、⑦鹿角製垂飾、⑧骨製装飾具、⑨サメ歯製垂飾、⑩鳥類尺骨製管玉、⑪オオツタノハ製貝輪

火山に祈る

Praying to the Volcano



昭和61年(1986)に噴火した三原山 みほやま

画像：岩崎 薫氏撮影・提供

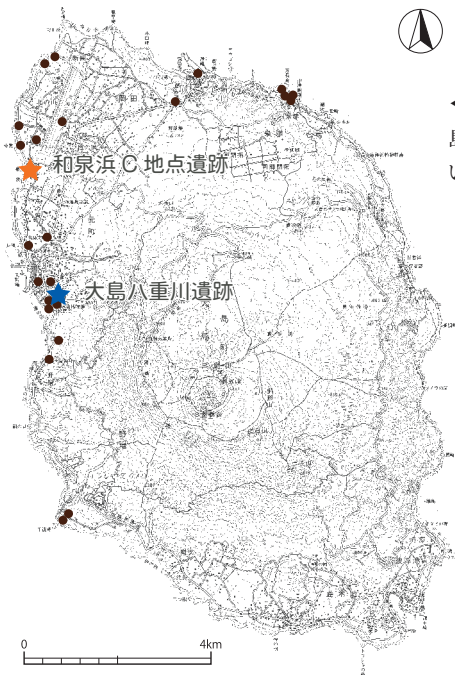
島々では、古代から特徴的な神まつりが行われてきました。その地理的な特性から、火山噴火ふんかに関わるまつりは、島にくらす人々にとってはなくてはならない、とても大切な行為だったのです。それを物語るように、島の各所からは、多量の土器や石製の玉類などを神に捧げた場とくちょう（祭祀跡）が発見されています。

Unique *Matsuri*, ritual for gods were held on the islands from the ancient times. From the geographic characteristics, *Matsuri* related to volcanic eruptions were a very important, indispensable act for the people who lived on the islands. As it clearly shows, places, where people offered a large number of pottery and stone beads (remains of a place of worship), are found from various areas of islands.



◀大島における古代の遺跡分布

島の北西部からは20箇所近くの遺跡が発見されているが、これらは主に集落遺跡と祭祀跡である。



いずみはま 和泉浜C地点遺跡の祭祀

大島北西部の浜から発見された遺跡で、東海産の須恵器や畿内系土器きないけいほじき、鉄刀、短冊形金・銀製品など祭祀色の濃い遺物も見つかっている。

この遺跡が形成された7世紀後半、天武天皇13年(684)に伊豆大島で大噴火が起こったことが『日本書紀』に記されている。まさに、ここで御神火にほんしよき※を鎮めるための祭祀が執り行われたと推定される。

※御神火…特に伊豆大島の三原山の噴火を指す。



和泉浜 C 地点遺跡の遺物出土状況

そな
供えられた多くの土器が割られ、散乱した状態で発見された。

画像：國學院大學博物館提供



祭祀に用いられた品々 [和泉浜 C 地点遺跡]

古墳時代（7世紀） 國學院大學博物館所蔵

写真上：須恵器高坏、坏、蓋、長頸瓶。

写真左：短冊形金・銀製品、鉄刀、刀子、鉄鏃、鏢、銅釧。

画像左：國學院大學博物館提供



おおしまや えがわ 大島八重川遺跡の祭祀

平成 23 年（2011）に東京都埋蔵文化財センターが調査した遺跡で、和泉浜 C 地点遺跡とほど近い場所にある。溶岩や火山灰に覆われた地面には、いたる所に土器が据え置かれ、その場で割られたような状態で発見された。

命がけで本土から持ってきた貴重な土器を惜しげもなく神に捧げた背景には、火山の噴火そのものを神の力として畏れたからだろう。島の平穏を祈るため、日々まつりを行っていたのだろう。



画像：2012 東京都埋蔵文化財センター調査報告 271『大島町 大島八重川遺跡』東京都埋蔵文化財センターより転載

土師器 [大島八重川遺跡]

古墳時代（7世紀）

大島町教育委員会所蔵

左から、坏（2点）、高坏、台付盆。これらの土器には、赤く塗られたものが多く見られる。



黒潮をま方にかけて

Traveling Across the Black Current



海上から見た倉輪遺跡 縄文時代前期～中期の集落遺跡で切り立った崖上^{がけ}に立地する。
画像：1994『倉輪遺跡』東京都八丈町教育委員会より転載

島では、海を越えたさまざまな地域の土器が出土します。例えば、八丈島^{はちじょうじま}の倉輪遺跡^{くらわ}。縄文時代前期～中期（約 5,000 ～ 5,500 年前）の集落遺跡で、関東・中部をはじめ、東北、近畿・東海、北陸などの土器が発見されています。

土器を島にもたらした人は、さまざまな情報をも伝えたことでしょう。こうした営^くみが繰り返されることによって、黒潮^{くろしお}を介した^{かい}壮大な交流^{そうだい}が生まれました。

Pottery from various regions across the sea can be found on the island. For instance, Kurawa site of Hachijojima Island. Pottery of the Kanto-Chubu regions as well as the Tohoku, Kinki-Tokai, and Hokuriku regions were found at the remains of villages from the early to middle Jomon Period (probably 5,000 - 5,500 years ago). The people who brought the pottery to the island must have delivered various information to the people as well. Through repeating such activity, a grand exchange across the Black Current took place.

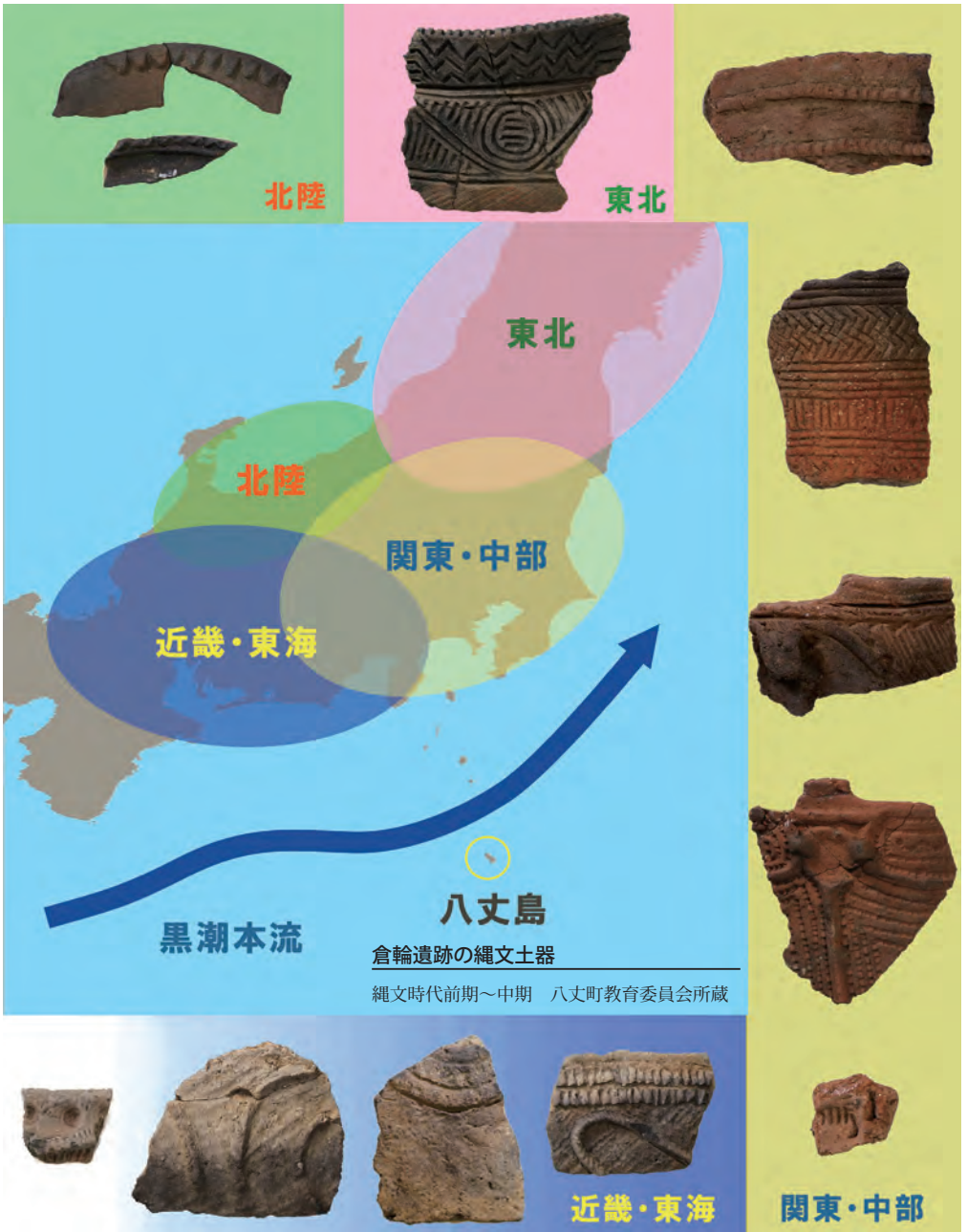


まいそう
埋葬人骨 [倉輪遺跡]

縄文時代後期～晩期

左は 20 歳代^{さい}の女性、右は 40 ～ 50 歳代の男性。この地で暮らし、一生を終えた人々だ。

画像：1987『東京都八丈町 倉輪遺跡』東京都八丈町教育委員会より転載



北陸

東北

東北

北陸

関東・中部

近畿・東海

黒潮本流

八丈島

倉輪遺跡の縄文土器

縄文時代前期～中期 八丈町教育委員会所蔵

近畿・東海

関東・中部

倉輪遺跡の土器のふるさと

文様の特徴という観点から見ると、倉輪遺跡ではさまざまな地域の土器が見つかった。これらの土器が直接持ち込まれたのか、他の地域の人々の手を経て運ばれてきたのかは分からないが、いずれにしても、黒潮の海の彼方からもたらされたことは確かだ。

八丈島と本州を隔てる黒潮は、海を越える障害にもなるが、その一方で、流れに乗れば遠方からの航海も可能にする。土器を携えてきた人々も、黒潮に乗って海をわたってきたのだろう。

危険と隣合わせの航海

Voyage Faced with Dangers

平成 4 年（1992）調査時の遺物確認状況 中央の大きな円柱は花崗岩製の灯籠竿石（脚部）

これは、今から約 200 年前の江戸時代末頃、神津島沖に難破した船の積み荷の一部です。発見された播鉢・硯・石臼・やきものなどがいずれも関西地方の産物と考えられることから、沈没したのは大坂周辺から江戸に向かっていた千石船と考えられています。

蒼海わたる人々は皆、航海の安全を祈って臨んだことでしょう。しかし、仮に願いが届かなかったとしても人々は強い覚悟を胸に、海に挑み続けてきたのです。

This is a portion of the load on a ship that was wrecked offshore of Kouzushima island during the end of Edo Period about 200 years ago. Since the mortar, ink stone, millstone, and ceramics that was discovered are thought to be a product of the Kansai region, *Sengoku* cargo ship that was heading towards Edo from the Osaka area. Everyone who crossed the blue ocean must have sailed praying for a safe voyage. Regardless of whether their prayers were heard, people have continued to challenge the ocean with strong determinations.



海底に眠る礎。

70 貫程度の規格と推定される。

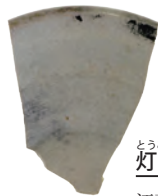


播鉢 [同左]

江戸時代末（19 世紀中頃）

東京都教育委員会所蔵

形態や播目の特徴から、大坂の南に位置する泉州・堺のものと考えられる。



灯明皿 [同左]

江戸時代末（19 世紀中頃）

東京都教育委員会所蔵

陶磁器の中には、船員が用いていたものが含まれているようで、この灯明皿も実際に明かりを灯した時についた煤が付着している。



硯 [神津島沖海底遺跡]

江戸時代末（19 世紀中頃） 東京都教育委員会所蔵

硯に用いられている緑色千枚岩は、紀伊半島から四国周辺で採れるものと推定されている。

はるか南洋を越えた人々

Poeple Beyond the Far South Pacific



海上から石野遺跡を望む 印の先に石野遺跡が所在する

画像：2005 東京都埋蔵文化財調査報告 21『小笠原村北硫黄島石野遺跡』東京都教育委員会より転載、一部改変

東京から約 1,300km の太平洋上に浮かぶ小笠原諸島北硫黄島。この島の石野遺跡で出土した数々の土器や石器は、他の遺跡調査ではおよそ見ることでできない南方系文化の特徴を持っていたのです。しかもそれらは、年代測定により約 1,900 年前（弥生時代に相当）のものだとされたのです。このことは、とうきょうの島々がはるか昔から、遠く南洋ともつながっていたことを物語っています。

Kita-iwojima Island of the Ogasawara Islands are located on the Pacific Ocean about 1,300 kilometers from Tokyo. Many potteries and stone tools that were excavated at Ishino site in this island had characteristics of the culture of the South Pacific that can not be found in other archeological sites investigation. Moreover, as a result of dating, it was probably 1,900 years ago (equivalent to the Yayoi Period).

This tells us that the islands of Tokyo had connection with the far South Pacific from the distant past.

石野遺跡の土器

すべて無文だが、注目すべきはその厚み。厚さ 3 cm を測るような土器は、国内の遺跡ではほとんど例がありません。こうした土器の類似例は、マリアナ諸島のガムやサイパン周辺で認められることから、この地域との関連がうかがわれます。



土器 [石野遺跡]

約 1,900 年前（弥生時代並行）東京都教育委員会所蔵

実測図：2005 東京都埋蔵文化財調査報告 21『小笠原村北硫黄島石野遺跡』東京都教育委員会より転載、一部改変

石野遺跡の貝製品

どちらもシャコガイの腹縁部と素材とする貝斧。貝斧は沖繩・八重山諸島にも存在しますが、貝殻の腹縁部を素材とする貝斧は、ミクロネシア地域に特徴的に分布することが知られています。



小形貝斧 (①)・貝斧未製品 (②・③) [石野遺跡]

約 1,900 年前（弥生時代並行）東京都教育委員会所蔵

石野遺跡の石器

打製石斧も、とにかくその大きさに目が奪われます。さらに、形や大きさの多様性や数の多さも特徴的で、一般的にイメージする弥生時代の様子とは異なっています。乳棒状の石器は、南太平洋地域で「パウンダー」と呼ばれる道具に似ており、ここでも南洋地域の影響がうかがえます。



①～③打製石斧

④～⑦磨器

[石野遺跡]

約1,900年前(弥生時代並行)

東京都教育委員会所蔵

①～③は粗面安山岩製、④～⑦は多孔質玄武岩製。

八丈島の石器

南洋の影響は、八丈島にも認めることができます。例えば、湯浜遺跡の敲石は、石野遺跡の磨器によく似ています。倉輪遺跡では、一般的な黒曜石製の石鏃が存在する一方で、驚くほど大形のものも存在します。帰属年代不詳の磨製石斧2点も、その形などから南方文化の影響を受けたものと指摘されています。この島が「縄文文化と南方文化の交差点」といわれる所以です。

八丈島で発見されたさまざまな石器

①・②・⑦年代不詳、③・④・⑥縄文時代前期～中期、⑤縄文時代早期
すべて八丈町教育委員会所蔵

①は伝三根遺跡とされる磨製石斧(玄武岩製)、②供養橋遺跡の磨製石斧(玄武岩製)、③・④は倉輪遺跡の石鏃(③安山岩製、④は黒曜石製)、⑥は同遺跡の敲石(岩種不明)、⑤は湯浜遺跡の敲石(玄武岩製)、⑦は近代の採集品(岩種不明)だが、南洋とのつながりを示す資料として参考展示した。

①・②・⑤東京都指定有形文化財(考古資料)



貝を多用する南洋文化

南太平洋地域の参考例として、約100年前に収集された民族資料を紹介します。

貝斧(①・②)・首飾り(③)

年代不詳 学習院大学史料館所蔵

①は大形のリュウキュウダケを、②はシャコガイの蝶番部分を素材とする貝斧で、南西諸島から南太平洋の広範囲に分布する。③のウミギク製首飾りは、域内の交易品だった可能性がある。



蒼海わたる人々

Poeple Sailing the Great Pacific Ocean



マーシャル諸島帆船模型

約 100 年前 学習院大学史料館所蔵
マーシャル諸島共和国ジャルート環礁地域の大型アウトリガーカヌーの模型。推定縮尺は 1/10 ~ 1/20 で、長期の航海も可能とするタコノキ製の倉庫や敷物を備えている。タコノキの葉を編んで作った帆には連続する三角形の装飾が織り込まれていることから、首長などが用いる船がモデルだったと考えられる。この模型は、戦前の南洋庁ジャルート支庁から高松宮家に献上された後、昭和 11 年 (1936) に旧制学習院歴史地理標本室に下賜された。

エンジンもコンパスもなかった時代、どのようにして数千 km もの大海原をわたることができたのでしょうか。約百年前に作られたカヌーの模型と海図はそのヒントのひとつ。かつての南洋の人々が、遠い島へと向かっていたことを物語っています。

島は、いつの時代も意志のある人に開かれた豊かな世界です。さあ、皆さんも、さらなる豊かな知の恵みを求めて、広大な歴史の海に想像の帆を広げてみませんか。

In an age when neither engines nor compasses existed, how were people able to cross thousands kilometers on the vast ocean field?

A model of a canoe and charts made probably 100 years ago, are hints to the answer. It tells us that the former people in the South Pacific were sailing to distant islands.

Islands are a new abundant world opened to the strong-willed, regardless of generation. Let's spread the sail of imagination in the sea of magnificent history and go on search for more blessings of fruitful wisdom.



画像：2013『百聞ハ一見ニ如カズー旧制学習院歴史地理標本室資料一』学習院大学史料館より転載、一部改変

海図

約 100 年前 学習院大学史料館所蔵
海流などを表す細い木材を縦横に組み合わせ、島の位置にはタカラガイが結び付けられている。このような海図は航海術を学ぶためのもので、さまざまな情報を示すためにサンゴやヤシの葉などを取り付ける場合もあった。この海図も、帆船模型とともに、高松宮家から旧制学習院に下賜された。

とうきょうの島々 発掘調査年表

ここでは、とうきょうの島々で行われた遺跡の調査を年表形式で振り返ります。
※主な遺跡の調査について記載しています。

西暦	和暦	島名	遺跡名	主な遺跡の調査成果など
1901	明治 34	大島	龍ノ口遺跡	島民の手により、龍ノ口遺跡が発見される 坪井正五郎『伊豆諸島の石器時代遺跡』『東京人類学会雑誌』186(概報)発表 坪井正五郎『石器時代人民の交通貿易』『東洋学芸雑誌』18-240発表 坪井正五郎『熔岩流下の石器時代遺物』『時事新報』6460発表 鳥居龍蔵『大島の石器時代遺物』『時事新報』6482発表 大柴洋之助『伊豆国大島熔岩流下の人類遺跡』『地質学雑誌』8-99発表
1901	明治 34	大島	龍ノ口遺跡	鳥居龍蔵『伊豆大島溶岩流下の石器時代遺跡』『地質学雑誌』14-159・160発表 鳥居龍蔵『伊豆大島溶岩流下の石器時代遺跡』『東京人類学雑誌』194発表 佐藤博蔵『伊豆大島溶岩流下の人類遺跡に就ての疑問』『東京人類学雑誌』196発表
1920	大正 9	北硫黄島		東京帝国大学中井猛之進博士がマリアナ諸島植物調査の帰途で北硫黄島に立ち寄り、丸盤形磨製石斧を寄贈される
1942	昭和 17	北硫黄島		東京帝国大学中井猛之進博士採集の丸盤形磨製石斧を紹介、マリアナ諸島の先史文化との関連を示唆
1949	昭和 24	三宅島	ココマ遺跡	猪臼歯・人歯を採集、東京大学考古学研究室に寄贈
1950	昭和 25	三宅島	ココマ遺跡	縄文土器・貝殻・動物遺存体などを発見
1951	昭和 26	大島	大久保遺跡	古墳時代前期の竪穴住居跡、土師器を発見
1956	昭和 31	御蔵島 三宅島 三宅島 三宅島	ゾウ遺跡 坊田遺跡 ココマ遺跡 中郷遺跡ほか	縄文時代早・前期の竪穴住居跡、縄文土器・石器などを発見 弥生土器・黒曜石などを発見 弥生土器・黒曜石・骨角器・動物遺存体などを発見 積石遺構、和鏡などの祭祀遺物を発見
1957	昭和 32	利島 利島 御蔵島	ケツケイ山遺跡 大石山遺跡 ゾウ遺跡	弥生時代中期の竪穴住居跡、弥生土器・石器などを発見 試掘調査で縄文土器・石器などを確認 縄文時代早・前期の竪穴住居跡、縄文土器・石器などを発見
1958	昭和 33	利島	大石山遺跡	縄文時代後期の敷石住居跡、縄文土器・石器などを発見
1963	昭和 38	新島	田原遺跡	縄文時代中期～弥生時代中期の土器などを発見
1964	昭和 39	新島	田原遺跡	縄文時代晩期・弥生時代前期の土器・動物遺存体などを発見
1972	昭和 47	大島 利島 新島 式根島 神津島 神津島 三宅島 三宅島 八丈島 父島	野地遺跡ほか 利島大石山上方遺跡ほか 前田遺跡ほか 式根島No.1遺跡ほか 神津島せんぎ遺跡ほか 上の山遺跡 三宅島富賀下遺跡ほか 西原遺跡 湯浜遺跡ほか 大根山遺跡ほか	縄文時代早期の土器などを採集ほか 弥生時代中期の土器などを採集ほか 縄文時代中期の土器などを採集ほか 古墳時代前期の土師器などを採集ほか 縄文時代中期の土器を採集ほか 縄文時代前期の土器を発見 古墳時代の土師器を採集ほか 縄文時代前・中期の土器を発見 黒曜石などを採集ほか 丸盤形磨製石斧・礫器などを採集ほか
1975	昭和 50	三宅島		三宅村教育委員会による『三宅島の埋蔵文化財』刊行
1978	昭和 53	八丈島	倉輪遺跡	第一次調査、集石状遺構などを発見
1979	昭和 54	八丈島	倉輪遺跡	第二次調査、黒曜石製石器などを発見
1980	昭和 55	八丈島	倉輪遺跡	第三次調査、遺構・遺物は発見されていない 東京都島嶼地域遺跡分布調査団による『東京都島嶼地域遺跡分布調査報告書一大島・三宅島一』刊行
1981	昭和 56	三宅島 八丈島 御蔵島	中郷遺跡 倉輪遺跡 ゾウ遺跡	中世の積石遺構を発見 第四次調査、縄文時代前・中期の竪穴住居跡、縄文土器・石器などを発見 縄文時代早期～中期の土器・土製品・石器を発見
1982	昭和 57	利島 三宅島	大石山遺跡 物見処遺跡	第一次調査、縄文時代中・後期の土器・石器などを発見 群集する積石遺構を発見、平成17年までの調査により、大規模な礫石経塚であることが判明 東京都島嶼地域遺跡分布調査団による『東京都島嶼地域遺跡分布調査報告書一御蔵島・八丈島一』刊行 東京都教育委員会による『特集 小笠原諸島文化財調査報告』『文化財の保護』14刊行

西暦	和暦	島名	遺跡名	主な遺跡の調査成果など
1983	昭和 58	利島	大石山遺跡	第二次調査、過去の調査で発見された縄文時代後期の敷石住居跡を再確認、古墳時代前期の竪穴住居跡などを発見
1984	昭和 59	大島 利島 式根島 八丈島	下高洞遺跡 A 地区 大石山遺跡 吹之江遺跡 倉輪遺跡	縄文時代早期の竪穴住居跡、土器・動物遺存体などを発見 第三次調査、縄文時代の配石遺構、縄文時代前期～後期の土器・石器、古墳時代前期の竪穴住居跡などを発見 第一次調査、奈良・平安時代の土師器・須恵器・鉄刀・鉾などの鉄製品を発見 第五次調査、縄文時代前・中期の竪穴住居跡・土坑、縄文土器・块状耳飾りなどを発見 東京都教育委員会による「特集 伊豆諸島における埋蔵文化財の調査」『文化財の保護』16 刊行
1985	昭和 60	大島 利島 式根島 八丈島	泉津鉄砲場遺跡 大石山遺跡 吹之江遺跡 倉輪遺跡	縄文時代前期の土器・石器・動物遺存体などを発見 第四次調査、縄文時代中・後期の竪穴住居跡、縄文時代中・後期の土器・石器、古墳時代の石製模造品などを発見 第二次調査、奈良・平安時代の土器・鉄製品などを発見 第六次調査、縄文時代前・中期の竪穴住居跡、縄文土器・石器・埋葬人骨などを発見
1986	昭和 61	大島 大島 大島 式根島 八丈島	野増遺跡 和泉浜 C 地点遺跡 下高洞遺跡 D 地区 吹之江遺跡 倉輪遺跡	第一次調査、古墳時代後期の竪穴住居跡、土師器などを発見 第一次調査、古墳時代の土師器・須恵器・銅製鈴などの祭祀遺物を発見 縄文時代後・晩期の貝層、縄文時代後期～弥生時代の土器・石器・骨角器・動物遺存体などを発見 第三次調査、奈良・平安時代の土器・鉄製品などを発見 第七次調査、縄文時代前・中期の縄文土器・石器などを発見
1987	昭和 62	大島 八丈島	野増遺跡 八重根遺跡	第二次調査、古墳時代後期の竪穴住居跡、土師器・須恵器などを発見 第一次調査、古墳時代後期～奈良・平安時代の炉跡を多数確認、奈良・平安時代の土器などを発見
1989	平成元	八丈島 八丈島	火の湯遺跡 八重根遺跡	第一次調査、製塩土器などを発見 第二次調査、古墳時代後期～奈良・平安時代の炉跡などを発見
1990	平成 2	大島 八丈島 八丈島 八丈島	和泉浜 B 地点遺跡 火の湯遺跡 八重根遺跡	中世以降の積石遺構・溝などの発見 第二次調査、炉跡、製塩土器などを発見 第三次調査、古墳時代後期～奈良・平安時代の炉跡などを発見
1991	平成 3	大島 八丈島 八丈島 八丈島 八丈島 神津島	大島オンダシ遺跡 八重根遺跡 倉輪遺跡 鳥打遺跡・宇津木遺跡	古墳～奈良時代の集落を確認、土師器・須恵器などを発見 第四次調査、古墳時代後期～奈良・平安時代の土坑などを発見 第八次調査、縄文時代前・中期の竪穴住居跡、縄文土器・石器などの発見 江戸時代の祭祀遺構を確認、陶磁器・柄鏡などの発見 神津島村教育委員会による『神津島 その自然・人文と埋蔵文化財』刊行
1992	平成 4	利島 神津島 八丈島	堂ノ山神社境内遺跡 神津島沖海底遺跡 倉輪遺跡	第一次調査で、陶磁器・銅製品などを発見 江戸時代末の陶磁器・硯などを採集 第九次調査で、縄文時代前・中期の集石遺構、縄文土器・骨角器などの発見 東京都教育委員会による東京都埋蔵文化財調査報告 19『小笠原諸島の考古学的資料集』刊行
1993	平成 5	大島 利島 御蔵島 北硫黄島	和泉浜 C 地点遺跡 堂ノ山神社境内遺跡 神ノ尾遺跡 石野遺跡	第二次調査、古墳時代の土器・鉄製品などの祭祀遺物を発見 第二次調査、集石遺構、陶磁器・銅製品などを発見 中世の集石遺構などの発見 祭壇遺構・積石、無文土器・磨磁器などの石器・動物遺存体などを発見
1995	平成 7	大島 三宅島	和泉浜 C 地点遺跡 大里東遺跡	第三次調査、古墳時代の土器・石器・玉類・金銀製品などの祭祀遺物を発見 弥生時代の竪穴住居跡・土壇墓・土器棺墓などを発見
1998	平成 10	大島		大島町史編さん委員会による『大島町史 考古編』刊行
2002	平成 14	大島	家の上遺跡	奈良・平安時代の集落を確認、奈良・平安時代の土器・金属製品などを発見
2007	平成 19	三宅島	ココマ遺跡	弥生時代中～後期の土器・石器・貝輪・動物遺存体などを発見
2008	平成 20	三宅島	坊田遺跡	弥生時代中期の竪穴住居跡、弥生土器・石器などを発見
2009	平成 21	三宅島	島下遺跡	弥生時代前期の土器・石器などを発見
2011	平成 23	大島	大島八重川遺跡	古墳時代～奈良・平安時代の祭祀跡、土器などを発見
2012	平成 24	大島	充仁荘遺跡	古墳時代の土器集中、土器などを発見

島の遺跡

ここでは、展示で紹介しきれなかった遺跡を取り上げます。
とうきょうの島には興味深い遺跡がまだまだあります！

利島 大石山遺跡

おおいしやま

所在地 東京都利島村西山 21 号ほか

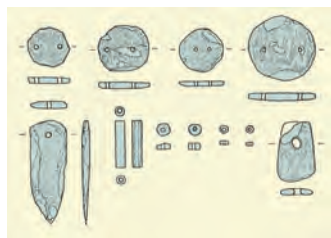
大石山遺跡では、昭和 32 年（1957）に最初の発掘調査が行われました。翌年の調査では縄文時代後期の柄鏡形敷石住居跡が発見され、当時、大きな注目を集めました。

その後、昭和 57 年（1982）から 3 次にわたる調査が実施され、縄文時代早期～後期の多時期にわたる土器が出土しました。過去に発見された敷石住居跡も再調査され、敷石住居跡と重なるように配石遺構があることが分かりました。また、この調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡が確認されたほか、祭祀に用いられたと考えられる石製模造品も発見されています。

大石山遺跡は、その重要性から昭和 63 年（1988）に東京都指定史跡に登録されました。



縄文時代後期の敷石住居跡



古墳時代の石製模造品・玉類

画像：1985『東京の遺跡 埋蔵文化財への理解を深めるために』東京都教育委員会、
1986『利島村大石山遺跡 - 範囲確認調査報告書Ⅳ -』利島村教育委員会・利島村大石山遺跡調査団より転載、一部改変

御蔵島 ゾウ遺跡

所在地 東京都御蔵島村里西の沢ナコウほか

ゾウ遺跡では、昭和 31 年（1956）と 32 年（1957）に発掘調査が行われました。調査では、縄文時代早期・前期の竪穴住居跡 4 軒が発見され、茅山式・諸磯式・十三菩提式などの型式の縄文土器、石器が出土しました。

その後、この調査地点は、開発や崖の崩壊が原因で消滅したと考えられていました。昭和 40 年代の現地踏査や、昭和 58 年（1983）の調査により、縄文土器や石器が確認されたことで、改めて遺跡として登録されることになりました。御蔵島は地形的に近寄ることが難しいにも関わらず、ゾウ遺跡で縄文時代の人の営みが発見されたことはきわめて重要な成果と言えます。



ゾウ遺跡遠景



発見された縄文土器・土製円盤・石器類

画像：1985『東京の遺跡 埋蔵文化財への理解を深めるために』東京都教育委員会、
1982『東京都島嶼地域遺跡分布調査報告書 - 御蔵島・八丈島 -』東京都教育委員会・東京都島嶼地域遺跡分布調査団より転載、一部改変

式根島 吹之江遺跡

所在地 東京都新島本村式根島 914

ヘリポート建設に際し、吹之江遺跡の存在が明らかになり、昭和59年(1979)から3年にわたり調査が行われました。C地点の調査では、奈良時代初め頃の須恵器や土師器をはじめ、鉄製の直刀、短刀、鉾などの武器類、鏡形鉄製品などが見つかり、注目されました。そのほとんどが完全な形であり、置かれたような状態で出土したこと、鏡のような祭祀色の強い遺物が含まれることから、祭祀遺跡であると考えられています。



C地点の遺物出土状況

大島の和泉浜C地点遺跡や大島八重川遺跡のように、ここでも火山に対する「神まつり」が行われたと推測されます。

その重要性から、吹之江遺跡は昭和62年(1987)に東京都指定史跡に、出土品は翌年に指定有形文化財に登録されました。



C地点の土器・直刀・短刀・鉾・鏡形鉄製品

画像：1987『東京都新島本村式根島 吹之江遺跡』新島本村教育委員会より転載、一部改変

三宅島 物見処遺跡

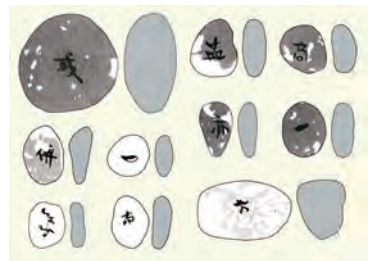
所在地 東京都三宅村伊豆13番地

物見処遺跡では、標高75～80mの傾斜面に計8箇所^{つみいしごう}の積石遺構が発見されています。昭和57年(1982)以来、毎年調査が行われ、その結果、1号積石遺構は6.3×5.5mの隅丸方形段^{すみまるほうけいだん}で、その周囲に幅1.2m程の溝がめぐることが明らかになりました。積石の高さは約1.3mで、直径30cm前後の円礫が石垣のように積み上げられています。段の内部からは、墨書された円礫が数多く見つっています。



1号積石遺構

伊豆諸島ではこうした積石遺構がしばしば見られますが、これらは中世～近世の仏教などの民間信仰^{しんこう}に関わる遺跡と推定されています。



1号積石遺構から見つかった墨書礫

画像：1992 國學院大學文学部考古学実習報告22『東京都三宅村伊豆 物見処遺跡 1992』國學院大學文学部考古学研究室より転載、一部改変

協力機関・協力者一覧 敬称略・五十音順

本企画展示開催にあたり、下記の機関、並びに関係者の方に御指導・御協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

赤星直忠博士文化財資料館 (公財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター
大島町教育委員会 学習院大学史料館 葛西臨海水族園 神奈川県教育委員会
神奈川県立生命の星・地球博物館 神津島村 國學院大學博物館
上越市教育委員会 千葉県立中央博物館 千葉市立加曽利貝塚博物館
東京都教育委員会 東京都教育庁大島出張所 東京都教育庁八丈出張所
東京都教育庁三宅出張所 八丈町教育委員会 舞鶴市文化振興課
三浦市教育委員会 美浦村教育委員会 三宅村教育委員会
横浜市歴史博物館 早稲田大学考古資料館

相原 正人 秋元 一猛 飯島 重一 五十嵐 達哉 池田 正人 池田 里香
井澤 純 井芹 武 今井 晃 岩崎 薫 内川 隆志 小野 亜紀 笠間 友博
神村 和輝 亀田 直美 木村 光之 車崎 正彦 黒住 耐二 釘持 輝久
斉藤 明子 齋藤 彦司 齋藤 元弘 佐藤 あゆみ 佐藤 洋 杉山 浩平
瀬能 宏 高梨 俊夫 高橋 健 田中 和明 土谷 恭平 長佐古 美奈子
中村 哲也 林 あずさ 林 薫 平田 健 堀田 桃子 本田 成美
山崎 京美 山下 浩之 山本 栄子 吉田 太郎 米倉 貴之

この冊子は、東京都埋蔵文化財調査センター平成30年度企画展示『蒼海わたる人々 考古学から見たとうきょうの島々』の解説冊子として作成しました。

平成30年度企画展示『蒼海わたる人々 考古学から見たとうきょうの島々』

平成30年3月31日発行

編集・発行 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033 東京都多摩市落合 1-14-2 電話 042-373-5296
